

短 報

成人看護学実習（慢性期）での外来実習の取り組み —通院患者担当実習の構築—

松本 文奈¹⁾ 高橋奈津子¹⁾ 八巻真紀子²⁾ 林 直子¹⁾

Development of Practical Training in Which Students Take Charge of Outpatients —Approach to Outpatient Practice in Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions) —

Ayana MATSUMOTO¹⁾ Natsuko TAKAHASHI¹⁾ Makiko YAMAKI²⁾ Naoko HAYASHI¹⁾

〔Abstract〕

Given the current environment surrounding medical care, it is significant for students to experience outpatient practice. Since 2013, our college has been conducting on-site practice combining one week in the ward and one week in the outpatient clinic as part of adult nursing practice (chronic phase), a practical training course for third-year undergraduate students. Herein, we describe the outline of the outpatient practice conducted in this course, focusing on practical training in which students take charge of outpatients. As a basic approach toward the implementation of this practical training, we also describe the outline of lectures on outpatient nursing and role-playing exercises, as well as enhancement and standardization of the guidance system of outpatient practice instructors. While practical training in which students take charge of outpatients was an effective form of practice for students to learn nursing activities and medical treatment support from the hospital outpatient department, the achievement goals appeared somewhat difficult.

〔Key words〕 adult nursing practice (chronic illness and conditions), Outpatient nursing practice, Outpatient nursing, Outpatient nursing teaching method

〔要 旨〕

在院日数の短縮化、外来医療の進展に伴い、病院外来は医療依存度の高い患者が通院治療するための場として専門性の高い医療、看護を提供する必要性が増してきている。こうした医療状況をうけ、本校では2013年より、学部3年生の実習科目である成人看護学実習（慢性期）において、病棟1週間、外来1週間を組み合わせた臨地実習を行っている。本稿では、本実習で実施している外来実習である、“学生が通院患者を担当する実習（通院患者担当実習）”の実習概要を報告する。また、本実習を実施するための基盤となる外来看護の講義とロールプレイ演習、外来実習指導者の指導体制の強化と均質化のための取り組みについて、それぞれの実施概要を報告する。

〔キーワード〕 慢性期看護学実習、外来看護実習、外来看護、外来看護教授法

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
2) 聖路加国際大学大学院看護学研究科（博士課程）・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Doctor's Program

I. はじめに

本校学部3年生の実習科目である成人看護学実習（慢性期）（以降、本実習と略す）では、2013年度より病棟1週間、外来1週間を組み合わせた臨地実習を行っている。これは慢性期看護を学ぶうえで重要となる、病とともに生きることや、生活と治療を両立する療養生活のありようを理解する視点が、従来の病棟実習だけでは習得することが難しい現状があったことに端を発する¹⁾。

在院日数の短縮化、外来医療の進展に伴い、病院外来は医療依存度の高い患者が通院治療するための場として専門性の高い医療、看護を提供する必要性が増してきている。更に、通院しながら比較的侵襲度の高い治療を提供し、重症化しないための療養支援を行うといった、多岐に渡る医療を提供する役割を担うようになった²⁾。こうした医療情勢を背景に、慢性期看護学領域では、看護基礎教育課程の看護学実習において、外来実習を組み込む実習への取組み報告が散見されるようになった。しかしその多くは、病棟実習期間の数日の見学実習、体験型実習を組み込む形態であり^{3) 4) 5)}、通院患者を担当して看護過程を展開し学習する実習を報告した文献は未だない。

「看護学実習ガイドライン（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告）」（2020年文部科学省刊行）に示されているように、大学の看護基礎教育において、近年の医療情勢を反映した効果的な看護学実習を開発することは、これからの看護を担う学生のために重要な取り組みといえる。病棟部門で入院患者を担当し看護過程を学ぶ実習と同様に、外来に通院する患者を担当し、外来で行われている看護過程を学ぶ看護学実習は、先駆的な取り組みとなろう。

本稿は、本実習において構築した通院患者担当実習について、実習概要と、その基盤となる取り組みの概要を報告するものである。更に、通院患者担当実習の今後の課題を考察する。

II. 通院患者担当実習の概要

1. 実習スケジュールの構成

本実習は、実習目標を「慢性・不可逆的な健康課題を持つ患者とその家族が、病いと共に生きることの認識と対処法を習得し、療養の場の特徴を踏まえて自らの生活を調整・再構築するように、PCC (People Centered Care) の概念に基づいた援助を考え、実践することができる」とし、4部署の病棟（聖路加国際病院：5W, 7W, 8W, 10E）と、9部署の外来（聖路加国際病院：腎センター、オンコロジーセンター、放射線腫瘍科、内科外来、皮膚科、泌尿器科、循環器内科・心臓血管外科外来、内

分泌代謝科、国立がん研究センター中央病院：通院治療センター）で臨地実習を行っている。

外来部門は看護師の配置が比較的小規模であることから、学生の受け入れは1～3名ずつの配置となるが、いずれの部署においても1名の患者を担当する。また、部署ごとの医療提供や治療の特徴により、担当患者と関われる日数や時間の長さが異なる。例えば、放射線腫瘍科は放射線治療を受けるため毎日通院する患者を担当するため、実習期間中毎日関われるが、病院滞在時間は30分程度である。内科外来やオンコロジーセンターなどは、点滴治療等の治療計画のもと、その日通院する患者を担当するため、実習期間中に患者を担当できるのは1日となるが、患者は半日程度病院に滞在するため、じっくりと関わるができる。

どの部署でも担当患者を持たない日（時間帯）は、その部署の特徴的なイベント参加や類似性のある通院患者への診療・治療見学などを通じて、外来医療、外来看護の特徴を学ぶ。

実習指導は、その部署に専属配置されている常勤看護師1～2名が担う。聖路加国際病院が院内教育として実施している「学部実習担当者研修」を受講し、その部署の看護に精通したジェネラリストが多い。

本実習は、本学カリキュラムに定められる3段階の実習レベルのうち、レベルⅡに位置し、学生自身が立案した看護計画の実践とその評価が求められる。学生は1週目の病棟実習において、入院患者に対し看護過程に沿った看護活動を行い、自身の看護実践を評価する学習を経たのち、外来実習に取り組む。

2. 通院患者担当実習の進め方

本実習の2週目に実施する外来実習スケジュールを図1に示す。

外来実習初日、実習指導者は、翌日もしくは翌々日に来院予定の通院治療中の患者の中から、学生の担当患者を選定する。学生は電子カルテから現病歴、既往歴、現在進行中の治療、内服薬、療養の様子、前回受診時の様子などを情報収集する。また、来院日に予定されているスケジュール（検査や治療内容、他の外来受診や面談予定など）を確認し、患者の来院目的や治療目的を捉えるうえで不足している知識について、自己学習を行う。併せて、実習指導者や教員から助言を受けながら、担当患者が現在抱えている顕在的（潜在的）看護問題を捉え、事前に外来実習記録用紙（図2）に看護問題と看護計画を作成しておく。

外来実習2日目もしくは3日目、担当予定の通院患者が予定通り来院され、実習指導者が患者に実習協力を依頼し、承諾を得てから、学生は患者に挨拶し、通院患者担当実習を開始する。学生は担当患者の検査や診察、治

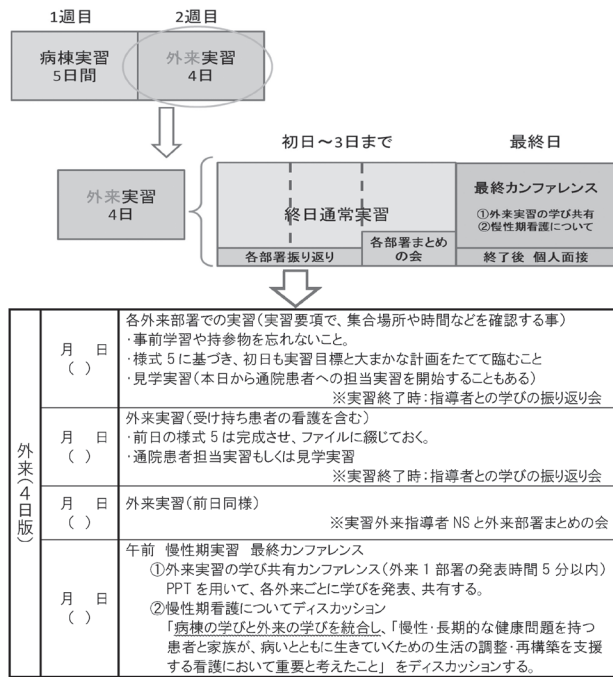


図1 成人看護学実習（慢性期）での外来実習の概要

療の場の見学に入ったり、療養の様子について話を伺うが、看護問題を意識して関わることで、得た情報を看護過程に沿ってアセスメントする学習につながる。

例えば前立腺に放射線治療の照射を開始したばかりの患者を担当した学生が、担当患者から「最近下痢気味で」

という話を聞いた場合、看護問題を意識していれば、「放射線療法の影響から生じているのではないか？」「放射線療法の腸管への影響が出始める時期だからではないか？」と考え、看護過程に沿って更に意図的に必要な情報を患者から収集する必要性に気付く。学生は事前に学習していた観察計画（O-P; Observation Plan）を踏まえ、下腹部に放射線照射を受ける患者の副作用について系統的にアセスメントした内容を、実習指導者に報告出来るようになっていく。

外来実習開始当初は、学生にとって外来で行われる看護活動は、来院日に予定されているスケジュールを終えるための関わりだけと捉えがちである。しかし、看護過程の実践の積み重ねや、看護師の関わりが健康課題の解決に貢献する実感を得ると、学生は「外来でも看護過程に沿って看護活動を行う必要がある」という気付きに至る。その気付きに至るよう、実習指導者と教員が連携して、学生が取り組んだ担当患者への看護活動を丁寧に振り返る指導が重要となる⁶⁾。

外来実習後半、学生は具体的な援助計画（T-P; Treatment Plan）や教育・指導計画（E-P; Education Plan）を具体的に立案し、連日担当患者に会える部署で実習する学生は、苦痛症状を緩和するためのセルフケアの方法に関する教育的支援を、手作りのパンフレットを用いて実施することもある。実習期間に担当患者と会えるのが

様式 5

【外来治療場における実習 記録用紙（外来実習2日目以降）】

学籍番号 _____ 外来実習（ _____ 日目） 受け持ち（ _____ 回目）
月 日 曜日 時 分 ～ 時 分
学籍番号（ _____ ）氏名（ _____ ）

1. 担当のする患者のプロフィール

1) 患者の概要（年齢、性別、家族構成、職業、発達課題など）

2) 既往歴とその治療歴

3) 診断名、現病歴、病期

4) 治療内容

・本日予定されている治療と全体の治療計画の中の位置づけを示す。
・薬剤の種類、量、放射線照射量と照射部位等、詳細を記載。

2. 実習目標

・受け持ち患者の看護過程から導き出した患者目標を立てる。（受け持ち患者のいない日は外来看護の特徴等を学ぶための実習目標を立てる。）

3. 担当する患者の看護問題

4. 看護活動（看護問題ごとにOTEで記載）

7:45 8 9 10 11 12 13 14 15 16

スケールには大まかな行動計画が1日の流れでわかるように記載する。昼休憩は、受け持ち患者のスケジュールとケアプランを勘案して、1時間とすること。

以下余白には、看護問題ごとにケアプランを、O、T、Eで記載する。用紙が不足の場合、適宜追加して可。（個別性や強みを考慮して計画する）

(例) #1 O) _____
T) _____
E) _____
#2 O) _____
T) _____
E) _____

5. 患者および家族が、病とともにどのように生活しているか

1) 健康上の問題にどのように対処していたのか

2) 気持ちの変化にどのように対処していたのか生活をどのように調整・再構築していたのか

3) 生活や社会的役割をどのように調整・再構築していたのか

6. 実践および見学した看護活動とその結果、およびそれに対する評価

看護活動とその結果

評価

看護問題ごとにSOAPで記載。

7. ナースからのコメント

ナースや指導者から頂いたアドバイスを学生自身が記載。

8. 本日の実習を通して学んだこと

図2 外来治療場における実習記録用紙

1日となる部署で実習する学生は、教育的支援を実践する機会を得難いが、類似性のある通院患者のリハビリテーション見学、専門性の高い指導場面見学、看護専門外来での療養面談見学などを通じて、患者の個別性、患者の病期による支援の違いなどを学習する機会に恵まれる。

外来部署によって実習内容は多岐に渡るが、それぞれの学生が配置された外来部署で看護師が行う療養支援の実践を学び、本実習の実習目標達成を目指し実習を進める。

3. 外来実習指導者との振り返り会の実施

実習指導者は、少人数の看護師で自部署の診療を円滑に進める業務を担っている。緊急入院・緊急処置などの案件が発生すると、学生への実習指導がタイムリーに担えないこともある。タイムリーに外来看護師が行っている看護の解説が受けられないことで、例えば、来院したばかりの患者との何気ない会話、待合室や診察室での患者の様子観察が、療養上の健康課題を捉えるアセスメントに活用されていること、看護過程に沿った思考プロセスで患者の身体・心理社会面を瞬時にアセスメントしていることなどが、学生には伝わりにくい状況が生じることもある。

こうした状況を回避し、学生の疑問はその日に解決して帰校できるよう、毎日、実習終了前で外来業務が落ち着いたタイミングに、実習指導者との振り返り会を設定した。振り返り会では、学生の質問に答えたり、看護師がいつ、どのように情報を集め、どうアセスメントしたか等の解説や、外来の事務的業務の流れの中でいかに療養支援を組み込んでいるかなどを伝えている。煩雑な外来業務を円滑に進めながらも、短時間で患者の状況や必要な看護を見定めて実践する外来看護師の思考プロセスを学ぶ場として、外来実習の重要な要素となっている。また、ベテランナースの看護観に触れる機会にもなり、学生が将来のキャリアを考える場としても意義深い機会となっている。

4. 「外来実習 学び共有カンファレンス」の設定

外来は診療科により通院患者の疾患、治療、看護が様々であるため、部署の専門性により学生の学習内容は多種多様となる。例えば皮膚科外来実習では、尋常性乾癬患者への光線療法や皮膚疾患の軟膏処置に毎日通院する患者を担当することで得る学びがあり、オンコロジーセンターでは抗がん剤通院治療を受ける患者を担当することで得る学びがある。各部署で得た学びを学生自身がまとめ、他学生に報告することで、外来医療・外来看護の視野を拡げること、更には共通する看護を考察することを目指し、実習最終日に「外来実習の学び共有カンファレンス」を設けることとした。

Ⅲ. 通院患者担当実習の基盤となる学習・取組みとその効果

1. 基盤1：成人看護学Ⅱでの「外来看護」講義

2014年度までの臨地実習後の学生アンケートにおいて、「外来に行くまで外来看護師は受付をしている人だと思っていた」といった感想が散見されていた。外来で看護師が実施している診療の補助に関する看護は、学生自身が外来患者として病院を受診した経験を1度は持っていることを前提とすると、想起しやすいものと考えられる。しかし、治療継続や療養を支援するための看護が行われていることへの学生の認知度は低く、限られた実習日程の中で、本実習の実習目標(Ⅱ-1に前述)を効果的に達成するためには、事前に学問的教授が行われることが必要と考えられた。

そこで、本実習の前提科目となる成人看護学Ⅱの概論の1単元に、2015年度より「外来看護と退院調整」を位置づけ、講義を開始した⁷⁾。講義の中では事例を用いて、外来通院患者の看護支援を考えるグループワークを行い(図3)、外来からの療養支援において注目すべき健康課題を考える時間を設けることとした。

更に、各外来部署の処置室や治療の様子、看護外来などの写真を映写した。学生からは「外来実習が楽しみなになった」「外来看護をきちんと学んだことがなかったの、何をするとところなのか理解できてよかった」等の反応が得られ、外来実習につながる効果的な基盤学習となっている。

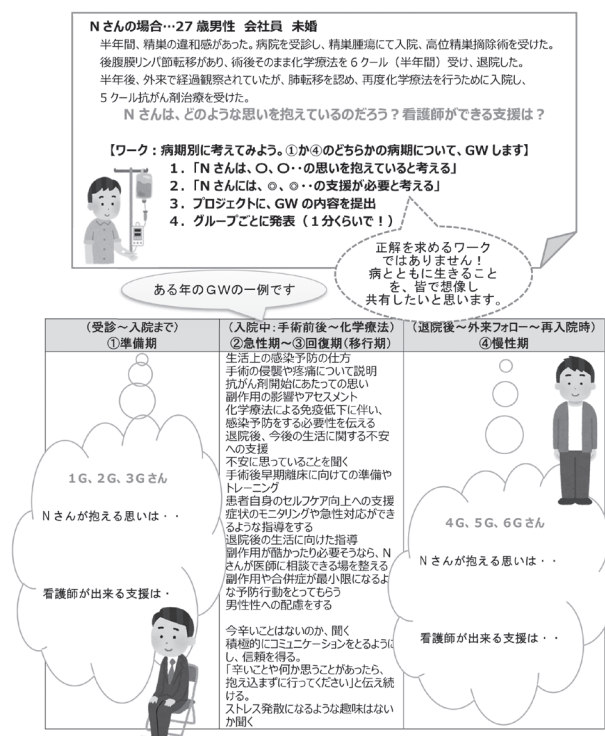


図3 外来通院患者の看護支援を考えるフループワーク資料

2. 基盤2：成人看護学Ⅱでのロールプレイ演習

2015年から成人看護学Ⅱの演習に、学生が外来での教育的支援を行うロールプレイを導入している⁸⁾。この演習は、糖尿病患者のAさんが長い療養生活の末、インスリン自己注射を導入することとなり、自己注射の教育指導を受ける場面を設定し、行われる。

ロールプレイでは、看護師が自己注射の教育的支援を行う前の診療待ち時間に、看護学生がAさんの巧緻性、視力、理解力等の情報を収集する。このロールプレイは、いかなる療養の場でも必要となる情報収集の実践力を養成するための演習として行っているが、指導場面を「外来の面談室」としていることから、学生は、外来はこうした指導を担う場でもあるという認識をもつことができる。

実際に外来実習で教育的支援を実践した学生からは、「患者さんの巧緻性を確認するような演習をした時、尋問のようになってしまったので、その反省を活かして、患者さんから話が聞けた」「外来で、どうやって看護師は患

者さんにアドバイスをしているのだらうと思っていたが、外来の待ち時間にパッと声をかけて情報収集していた。あまりに短時間でびっくりしたが、演習でやったことと同じだった」という感想も聞かれ、外来実習に向けた効果的な事前準備となっている。

3. 基盤3：外来実習指導者の指導体制の強化と均質化

外来は診療科により通院患者の疾患、治療、看護が様々である。学生は学習できる看護や指導内容が多様であることから、部署によって実習内容に偏りが生じる懸念があった。

当初より外来実習指導者から、「自分の部署は他の部署より学べていないのでは」「担当患者がいない日は、部署特有の診療場面や看護の場面に参加・見学してもらっているが、学びになっているのか」といった声があり、2015年より、自部署で学ばせることができること、他部署で学んでいることについて、情報の交換・共有化を図る試みを開始した。

表1 外来実習 各部門 週間スケジュール 2015

	腎センター	内分泌代謝科 外来	循環器内科・心臓 血管外科外来	内科外来	オンコロジーセンター	放射線腫瘍科	国立がん研究センター 中央病院 通院治療センター
初日	部門オリエンテーション、見学（シャドウイング） 患者紹介、翌日の受け持ち患者の情報収集・実習目標、看護問題と計画の立案						
	★夕方、日勤 後レポート参加				★午後は曜日により、サバイバーシップグループの見学ができるかもしれません（調整中）	受け持ち患者 選定 （2名／1学生）	
2 5 （3） 4 日目	受け持ち患者への看護展開						
	（火）PM 腹膜透析外来 見学 （水）PM 腎臓病クリ ニック見学 （金）PM （そらまめ塾 見学） ★夕方、日勤 後レポート参加	（随時見学） ・糖尿病療養指導 ・透析予防指導（看護師、管理栄養士） ・フットケア外来 ・フットチェック ・自己血糖測定・自己注射指導 （水）PM 3 day レッスン（午後）	心臓リハビリテーション参加（毎日） 循環器栄養指導見学（随時） 診察見学（適宜） ※リハビリ・自己血・看護外来・栄養指導等、診察以外でも関われる患者さんを選定し、情報収集をしたうえで診察見学も組込む。 （水）or（木） 看護外来見学、自己血見学	受け持ち患者の検査・診察等に行き（毎日） ★受け持ち患者の了承をいただくまで、情報収集、見学（シャドウイング）など タイミングがつけば参加、見学が可能な場面 ・在宅酸素療法患者の看護師面談 ・内視鏡検査（検査前・検査中・検査後） ・ストーマ外来 ・腹腔穿刺処置 ・オンコロジーセンター	受け持ち患者の検査・診察などに行き（毎日） ★受け持ち患者が来院するまで、下記カンファレンスに参加 （火）腫瘍内科カンファレンス （水）プレスト+腫瘍内科合同カンファレンス （木）腫瘍内科カンファレンス	初診患者診察、初診時オリエンテーション同席 照射開始時、照射終了時、照射後初回診察時オリエンテーション同席 多職種でのミーティング参加	（火） 受け持ち患者への看護展開（1人目） （水） 午前）外来看護師について外来患者の受診の様子や看護師の介入について学ぶ（第一外来領域） 午後）翌日に受け持つ患者について情報収集・実習目標・看護問題と計画の立案（通院治療センター） （木） 受け持ち患者への看護展開（2人目）
	翌日の受け持ち患者の情報収集 日々の実習の振り返り会						
最終日	同上 夕方）実習まとめの会	同上 夕方）実習まとめの会	同上 夕方）実習まとめの会	同上 （金）アフタヌーンカンファレンス参加 夕方）実習まとめの会	同上 夕方）実習まとめの会	同上 夕方）実習まとめの会	同上 夕方）実習まとめの会 （15:00～15:30）
受け持ち患者	血液透析施行中の末期腎不全患者	糖尿病	心不全 心筋梗塞後 冠動脈バイパス後 弁形成or置換術後 大動脈解離	・血液疾患 ・リウマチ ・慢性呼吸不全 ・肝機能障害 ・消化器癌、肺癌等	乳がん（術前、術後、再発）	乳がん 前立腺がん 食道がん 肺がん	乳がん 大腸がん その他 （悪性リンパ腫、膵がん、胆道がん）

こうした指導者間の指導内容の共有(表1)は、各外来部署の看護の特徴を明確化する機会となり、各実習指導者から、「自部署が目指す看護の特徴を伝えやすくなった」「自分が所属している部門の看護の特徴を伝えればいいんだと安心した」など、外来看護の何を伝えればいいのか迷いがなくなったとの声をいただいている。

更に、「看護専門外来の見学を組んでいる部署があるんですね。うちでも看護専門外来に1人1回は入れるように組んでみます」「透析外来では、腎代替療法の意思決定に向けた面談があります。こうした面談に同席できる部署は少ないようなので、日程が合えば積極的に面談見学を組んでみます」など、各外来が持つ特徴的な学習機会を実習スケジュールに組み込む工夫も始まり、実習指導者の指導力の向上、均質化が実現している。

実習指導者が学生の学習成果を確認する場の提供として、実習最終日開催する「外来実習 学び共有カンファレンス」(詳細はⅡ-4に前述)への参加も依頼している。各部署の特徴を統合して外来医療・外来看護を考察する学生の発言を聞き、「こうして学びを拡げていけるなら、今の実習指導は間違っていないと安心した」「改めて外来部門の中での自部署の医療の特徴を認識した。自分が取り組んでいる看護を伝えればいいのだと思った」との意見をいただいている。これらの取組みは、安定した外来指導につながっていると感じている。

聖路加国際病院では、CNE(クリニカル ナース エducator)が主催する、院内の学部実習担当者が一堂に集う会が定期的に開催されている。この会に本実習に携わる教員も参加し、部署間に共通する課題を確認したり、臨地指導者間の交流に参画できていることも、実習指導者との連携強化となっていると考えている。

Ⅳ. 今後の課題

学生の実習後アンケートから、通院患者担当実習は、病院外来から行う看護活動や療養支援の具体的な学びにつながる効果的な実習形態という評価を得ている。一方で個別的な看護計画の立案という到達目標については、やや難易度が高いことも窺えている。

2022年度の学部3年生の本実習は、新カリキュラムで展開する。到達目標について、再考するタイミングとなる。

Ⅴ. まとめ

本校学部3年生の実習科目である成人看護学実習(慢性期)で実施している外来実習である、“学生が通院患者を担当する実習(通院患者担当実習)”の実習概要を報告した。また、本実習を実施するための基盤となる外来看護の講義とロールプレイ演習、外来実習指導者の指導体制の強化と均質化のための取り組みについて、それぞれの実施概要を報告した。

近年の医療状況から、学生が外来実習を経験する意義は大きい。今後は、この取り組みの学習効果を確認する調査の実施等も視野に入れ、外来看護の教授法や実習形態を検討していきたい。

引用文献

- 1) 飯岡由紀子, 高田幸江. 病棟実習と外来実習を組み合わせた臨地実習成人看護学実習(慢性期)の構築. 聖路加看護大学紀要. 2014; 40: 112-7.
- 2) 厚生労働省. 外来医療(その1). 第236回中央社会保険医療協議会総会資料(平成25年1月23日)[Internet]. <http://www.mhlw.go.jp/file.jsp?id=146821&name=2r9852000002sfb5.pdf> [参照 2021-10-01]
- 3) 志賀加奈子, 前田陽子. 外来における臨地実習に関する国内文献レビュー. 日本赤十字北海道看護大学紀要. 2014; 14: 29-35.
- 4) 柴田和恵, 大野和美, 臺野美奈子ほか. 成人看護学臨地実習における外来看護体験実習での学び. 天使大学紀要. 2015; 15(2): 41-53.
- 5) 長瀬雅子, 高谷真由美, 青木きよ子ほか. 慢性的な疾患・状態を抱える成人患者を対象とした看護学実習における体験型実習の意義. 医療看護研究. 2011; 8(1): 1-7.
- 6) 高田幸江, 高橋奈津子, 松本文奈. 病棟実習と外来実習を組み合わせた成人看護学実習(慢性期)における指導体制強化に向けた取り組み. 聖路加国際大学紀要. 2015; 1: 40-5.
- 7) 松本文奈, 高橋奈津子, 高田幸江ほか. 成人看護学(慢性期実践方法)における外来看護教授法確立に向けた取り組み～臨地実習における外来実習を見据えて. 聖路加国際大学紀要. 2017; 3: 146-51.
- 8) 高橋奈津子, 高田幸江, 松本文奈. 成人看護学(慢性期実践方法)におけるシミュレーション教育の取り組み. 聖路加国際大学紀要. 2016; 2: 68-71.